

知ってますか
技術の

あれこれ

21

東日本大震災に思う(4)

関東大震災から学ぶこと(2)



三浦 基弘

MIURA Motohiro

元大東文化大学講師
土木学会100周年記念誌編集委員

医師から官僚への道

「板垣死ストモ、自由ハ死セズ」の名文句が生まれたといわれる事件。1882(明治15)年4月6日、岐阜で遊説中の板垣退助は、暴漢に襲われ負傷。診察した若い医師は「(板垣)閣下、ご本懐でありましょう(やられて本望でしょう)」。その豪胆さに、板垣は「君を政治家にできないのは残念だ」と口にしたエピソードがある。この若い医師の名は後藤新平(写真1)。



写真1 後藤新平(1857-1929)

後藤は母方の高野長英の血を受け継ぐ、現在の岩手県奥州市生まれ。須賀川医学校(現福島県立岩瀬病院)で医学を学ぶ。卒業後わずか24歳で、愛知県立医学

校(現名古屋大学医学部)の校長になり、左記に述べたように、たまたま暴漢に刺された板垣退助の手当てをした。

その後、一時、相馬事件(明治年間に起こったお家騒動のひとつ)で入獄を経験するも、順調に昇進を重ね、内務省衛生局長、陸軍検疫部事務長官、台湾総督府民政長官、満鉄総裁、鉄道院総裁、外務大臣の要職を歴任。鉄道院時代、職員人事の刷新をはかったが内外から批判も多く、「汽車がゴトゴト(後藤)してシンペイ(新平 心配)でたまらない」と揶揄された。関東大震災が起きると、内務大臣のまま帝都復興院総裁に抜擢され、内閣の陣頭で手腕を振るった。

復興計画を指揮した後藤新平

世の中を動かすのは、ひとりの人間ではできないが、「大風呂敷」と揶揄された卓抜した発想を持ち蛮勇をふるった後藤新平の業績に焦点をあててみたい。関東大震災で壊滅した東京の復興に老獪な政治的駆け引きに翻弄されながら、不屈の闘志と情熱でリーダーシップを発揮した後藤の名は、戦後生まれの本誌読者の技術者の皆さんに馴染みが薄くなっているかもしれない。後藤は文献渉猟、情報収集とブレーンを登用する能力に、とても長けている。その辺りを探ってみたい。

関東大震災の2年前に、後藤は「都市計画と自治の精神」の論文を書いている。大正9年に東京市長に就任。当時の東京市を真の都市に変えるため、後藤は市民に6万5千通の葉書を送り、意見を求め、「八億円都市計画」